

漢字はホントは面白い Ⅲ

「足」のつく漢字



杉本 浩

2年間のご無沙汰でした。前回は「手」についてお話ししましたので、今回は「足」について説明いたします。



足 金文



止 甲骨文

「足」という字形そのものは、左図の金文でお分かりのとおり、上部の丸いもの（膝頭と言われています）と、下部のサンゴの枝のような形からできています。この下の部分の甲骨文をご覧いただくと、親指が突き出た足先の形（この場合は左足）であることが一目瞭然です。古代文字では、この足先の形が、足そのものだけでなく、「歩く」や「進む」という意味を表すときも大活躍します。

ただ、この字から進化した字は、現代では「止」という字になりますので、注意が必要です。「止まる」と「歩く」では大違いですが、「止」は足がじっとしていることを示しているということでしょう。となると、「歩く」の意味を表したいときは、文字字体に「動き」を与えなければなりません。古代の人が「造字センス」を発揮した場面です。



歩 旧字体



歩 甲骨文

「歩」という字は「止」と「少」からできているように見えますが、「少し止まる」という意味ではありません。旧字体は左図のとおりで、下部は「少」ではありません。では何かというと、下半分も足の形が変化したものなのです。この字の甲骨文は、左右の足を互い違いに出して、まさに「歩いて」いる様を、間違えようもなく明確に表しています。この甲骨文の方が、小学生も覚えやすそうですね。

「走」の上の「土」はもとは「大」で大きく脚を拡げている人の姿。腕も振り上げて、一生懸命走っている様子がうかがえます。下部はやはり足先の形です。



走 金文



正 甲骨文

「止」の形はいろいろな字に使われています。例えば「正」は、「一」＋「止」でできていますが、上部の「一」は元は四角い形で、城壁に囲まれた町（「邑」ユウと言いました）を意味しています。「正」はもともと、他の町に向かって進撃することを表し、現代の「征」の意味を表す字として作られたものです。



武 甲骨文



企 甲骨文



出 甲骨文



之 甲骨文



降 甲骨文



各 甲骨文



圍 金文



違 金文



衛 甲骨文



舞 小篆

また、「武」は、「戈」と「止」からなり、武器を担いで進軍する意味ですが、既に春秋時代の楚の国王の言葉（前6世紀）として、「戈を止める（停戦する）ことを武という」という、道徳的にこじつけた解釈が出ています（後世の創作かもしれませんが）。

「企」の字は「人」と「止」からなり、人がつま先立ちして遠くの様子を見ている形とされています。日本語の「くわだてる」は古語では「くはだつ」で、「くは」は「かかと」のことで、やはり爪先立つことで、漢字と日本語の語源の一致の例とされています。

「出」は、囲いのような場所から足が出ようとしているところです。

「之」という字も、現在ではかなり形が変わっていますが、足を使った字です。下部の「一」（スタートライン）から歩きだすところで、今も人名で「〇〇ゆき」と読むのは「行く」という意味からです。

足が上から下へ降りてくる字もあります。「降」という字は、天に届く梯子（こごとへん）を伝って、神様が降臨する場面です。

「各」も、口（祝詞を入れた箱との説があります）に向かって神霊が降りてくる様子で、「客」や「格（いたる）」の意味に通じるといわれます。

夏・変・陵・俊・愛などに含まれる夂（すいによ）も、足の形を表したものです。

足が横向きになったものもあります。「韋」はもともと「巡る」という意味で、口（町）の上下を、足が逆方向に進んでいる様子です。

「圍」（旧字体「圍」）は、「町の周りを巡る」から「包囲する」という意味を生じ、「違」は、足が逆方向に向いていることから、「すれ違う」を意味したもののようです。

進むことを表す字には、「止」（しんにょう）がつくことが多いですが、このしんにょうのものは「辵（ちやく）」という字で、やはり下部に足がついています。上部は彳（ぎょうにんべん）が変化したものです。

「衛」は、四つ角の真ん中に「韋」を置いた形で、都市の道路を巡回して警護する意味を表します。いろいろな字体が残っていますが、左図にあげたものには足が四つも描かれています。四つ角が「行」という字になったことも良く分かるかと思えます。

正面から見た両足としては、「舛」がよく使われます。左右の足が外に開いている形です。左図の「舞」では、上半身（「大」）の下に飾りを



隣 金文

付けた両袖があって、下部が左右の足先です。
「隣」は、なんといけにえの人を焼き殺す儀式を表しているといい、上半身と火の粉が一緒になって「米」の形になったそうです。その下の両足が、ジタバタしているように見えてきます。



發 小篆

最後に、両足を揃えて今から出発しようとしている様子として、𠂔 (はつがしら) をご紹介します。

「發」(旧字体「發」)の小篆は左図のとおりですが、上部に左右対称に並んでいるのが両足です…と言いたいところですが、大きな疑問点を見つけてしまいました。「止」の甲骨文(左足)は前掲のとおりですが、それと見比べると、「はつがしら」の右側が左足のように見えるのです。これでは両足を揃えることができません。



登 甲骨文

もっと古い甲骨文中で調べようと思いましたが、「發」の甲骨文は少ししかありません。代わりに「登」で調べると、11例中10例が、左図のようにちゃんと左右が合っていました(1例だけ左右逆)。ところが金文になると、左右逆のものや左足2本のものなど、おかし

なものばかりになってしまいます。

おそらく、時代が進むにつれて、字を作った時の考え方が忘れ去られ、その時代の書体(小篆とか楷書とか)に合わせて、書きやすく見やすいものに変えられていったものと思われます。

「はつがしら」については、私の知る限り、誰もこんな問題を指摘していません。この原稿を書こうと思ったおかげで、大発見(?)をしてしまいました。

やっぱり漢字は面白い!

◎用語解説

- ・**甲骨文** 現存する最古の漢字。殷代後期(約3300年前)に登場。占いの内容や結果を亀の甲羅や獣骨に彫り込んだもの。
- ・**金文** 青銅器の銘文として鑄込まれた文字。殷代末期(約3100年前)に登場し、周代に盛んになった。
- ・**小篆** 秦の始皇帝が定めた統一書体。約2200年前。

◎参考文献:

「新訂字統」普及版第5刷 白川静著、平凡社 2011年 他
(文中の古代文字は、台湾・中央研究院のウェブサイト「漢字古今字資料庫」から転載しました)

*私のホームページもご覧ください!

漢字教育士ひろりんの書齋

検索

Google か、YAHOO! JAPAN で検索!